
ラヴィ・ツ・レピは旅をする

横山紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラヴィ・ツ・レピは旅をする

【Nコード】

N9146M

【作者名】

横山紅葉

【あらすじ】

家族を亡くして独りぼちになったラヴィ・ツ・レピは、祖父の最後の願いを叶えるべく村の北西にあるという”シャの湖”を探しに出かける。

その道中でラヴィの身に起こる出来事をまとめたファンタジー物語。

旅立ち（前書き）

精霊や魔神が出てくる予定のちょっとしたファンタジーです。進みは遅いです。頑張ります。

旅立ち

一、

『わしらの村の、北西にある湖…シャの湖には精霊が住んどった』

祖父は、死ぬ4日前に思い出したようにそう話した。

猟師だった祖父は青年時代、仕留め損なった熊に襲われて肩を負傷し、瀕死のところをシャの湖の精霊に助けてもらったことがあるそうだ。

僕は、シャの湖なんて知らない。

『一度枯渴した。だがまだそこにあるはずじゃ』

枯れたのは、わしのせい

わしのために精霊は命を削った

いつの時代も精霊は人とともにある。忘れられた湖に、精霊は住めない。

『ラヴィ』

病床の祖父は震える手で僕の手を強く握り締めた。

『ラヴィ、わしは今まで精霊のことを忘れとった』

『湖を元のように…そして精霊に恩返しを……』

そうして祖父は逝った。

祖父はあの時話が出来る状態ではなかったかもしれない。それでも最後の力を振り絞って僕に頼みごとをしたのだ。

幼いころに母を流行り病で、父を事故で亡くした僕には、残った身内は祖父だけだった。

僕は涙よりも先に、北西の湖を目指した。

悲しみを紛らわすため、ただそれだけのために。

クム爺さん

二、

小さい時から僕を可愛がってくれた隣のアリユーおばさんには、しばらく家を留守にすると伝えにいった。

おばさんは一瞬驚いた顔を見せたが、何も聞かずに僕にシヨウの実が入ったパンをくれた。

かごいっぱい持って行けと言ってくれたが、食べきれないからと断った。

シヨウの実は、食べると体が温まる効果がある。

これから厳しい冬を迎える僕らの村にとっては無くてはならない食べ物だ。

おばさんの優しさに感謝しつつ、僕はおばさんの家を後にした。

数百歩進んで後ろを振り返ると、おばさんはまだ僕を見送ってくれていた。

大きく手を振ると、腕が千切れるのではと思われるほどおばさんは僕に手を振り返した。

「ラヴィー！村はずれのクム爺さんを訪ねな！ボケてさえなけりゃ、何か教えてくれるはずだよー！！」

おばさんは、何も言わなくても、僕が何をしようとしているのか、何となく分かるのかもしれない。

僕は再度大きく礼をした。

クム爺さん。

僕の祖父のことを若造呼ばわりする、年齢不詳のじいさんで、魚釣りの名人だ。

僕は数回しかあったことがない。

昔は、僕の家近所に住んでいたそうだが、クム爺さんが近所の飼った猫たちに際限なく釣った魚をやっていたら肥満猫が急増したそう。村はずれへの引越を余儀なくされたそう。何だかわいそう。うな気もするが、お気に入りの川から近くなると本人は喜んでいらしたらしい。

魚を釣るために、村から歩いて三日かかるリトンカ海にまでいったというのだから、この辺りの川や湖には誰よりも詳しいはず。シャの湖のことについても何か知っているかもしれない。

僕はクム爺さんの家へ急いだ。

クム爺さんの家は、蔦で覆われていた。生活感が感じられない。ここに本当に人が住んでいるのだろうか。

最近爺さんの顔を見たという人もいないし、まさか…

鍵のかかった扉を無理に開けようとする僕の背後から、若い男の怒

った声が僕に投げかけられた。

「誰？何してるの」

振り返ると、そこには髪の長い男がいて、うんざりした顔で思いつき僕を睨んでいた。

顔立ちからすると僕と同じくらいの年かも知れないと推測できるが、背は僕より随分高い。

「クム爺ならいないよ」

男は眉間にしわを寄せたまま僕の方に近づいてきた。

「また新たな漁場を探しに出てって20日が経つかない」

今度こそ帰ってこないかも、といいつつ男は持っていた鍵で玄関の扉を開けた。

「まあ入りなよ」

どうしたものかとためらう僕を見て、彼は今度はクスリと笑って言った。

「俺？俺はジンニー＝ジン。爺さんがいない間この家を管理してる。鍵だって爺さんから直接預かったんだよ」

彼は管理、といったが、薦が伸び放題のクム爺の家は綺麗に管理されているようには見えなかった。彼はクム爺さんとどのような関係なんだろう。不思議そうに見つめる僕にかまわず彼は喋り続けた。

「村の人達は毎日のように食べ物とか酒とか持って爺さんの様子を見に来るんだ。どうしてあの人あんなに人望があるのか、毎回毎回『爺さんは旅に出ました』って言うのも面倒くさいよ。うんざりするよね」

ああ、それで機嫌が悪かったのか。

「あんた俺と同じくらいだろ？爺さんに何のようだったの？」

僕はこの男が一体何者なのか分からなかったが、なぜか質問には答えなければならぬような気になって、今までの経緯と、これからの予定を話した。

「ふーん」

彼は僕に椅子を勧め、手際よくティーを入れてくれた。ショウの実のティーだった。アリユーおばさんを思い出して僕はクスツと笑っていた。

「どうしたの？ショウの実、嫌いだった？」

さっきも貰ったのだと、アリユーおばさんに貰ったパンを男にひとつ差し出した。

彼は、「君は体がポツカポカなんじゃないか」と笑いながら僕の差し出したパンを受け取った。

そして今まで食べた中で一番うまいよ、と男はおいしそうにパンを

ほおばった。

おばさんのパンを褒められると、何だか僕が褒められたような気になつて、僕も嬉しくなつた。

男は、不思議なほどに話しやすく、旅の前に感じていた緊張が少しずつほぐれていくのが分かつた。

話を始めて半刻が過ぎ、そろそろ暇を請おうとティーを飲み干した時、僕は初めて男に違和感を覚えた。

…影に、角が生えているように見える。

「爺さん探しに行くより、そのシャの湖の方へ行つたほうがいいんじゃない？ 爺さんは確か南のバーン海を目指すといつていたよ。森の木一本より大きい魚がいるんだつてさ。」

僕は返事をするのも忘れて彼の影を凝視していた。その視線に気づいた彼は、僕の見つめる方を目で追つた。

「あ。」

しまった、と彼は叫び、慌てて立ち上がった。

「君のおばさん、もしかしてパンの中にシヨウの実のほかに何か入れてる？」

彼が何かブツブツと唱えると、見る間に彼の影の角のようなものは消えていった。

そういえばアリユーおばさんは、パンの材料として、元気の元だといつていつもタンファの葉を乾燥させたものを入れているはずだ。

「タンファ！！人には薬でも俺たちには毒だ！！」

彼は急いで水を飲み、もう一度ブツブツと何かを唱えた。

「俺たちジン族がタンファを食べると、気づかないうちに獣たちの好物のおいを発するようになるんだ。…囲まれてなきやいいけど」

といいつつ恐る恐る窓から外を眺める。

「ああ、爺さんに怒られる」

彼はまるでいたずらが過ぎた少年のようにばつの悪い顔をして僕を振り返った。

「狼が20匹くらいいる……そのほかにも何か色々いる」

彼の言葉に驚いて、僕も急いで窓辺により、恐る恐る外を見た。

ありえない。本当に数十匹の狼がこの家を取り囲んでいる。他には、熊や狐、鷹…

そして集団の狼たちは少しずつ、家との距離を近づけていた。

僕は状況を飲み込めない。

一体何が起こったんだ？

そもそもジン族って何？

彼は困ったようにしどろもどろに僕の質問に答える。最初の威圧感
は嘘のように消えている。

ひどく背の高い彼が、ひどく幼く見えた。

本当に縮んでやしないか？

「ジン族は大地の精霊エアダイの流した血から生れた魔族のひとつだよ。そういえば最近の人は精霊だのなんだの信じないんだっけ？俺たちは森に木を植えて、その木の実を食べて生活している闘う力を持たない小さな魔人だよ」

そう言うのと彼の体は見る見る小さくなっていき、僕の身長のおよそ3分の1程の大きさになっていた。耳は大きくとんがり、顔は子供のようだった。角のように見えたのは、彼の大きな耳だったのか。

僕は夢を見ているのかと思い、2・3度頬をつねった。

夢じゃない。

祖父も言っていた、精霊。そして目の前の彼は魔族。すぐには状況を理解できなかった。

精霊は、人が信じなくなればそこには住めない、なんだっけ。

「クム爺さんの植えたこの蔦は精霊を信じてるって証なんだ。だから俺も、平気で出てこれるし精霊を信じない君にだって見える。ただ、調子に乗って今みたいにしくじるから、爺さんのいないここでは人の格好はするなって言われてたのに……」

何日も留守にしたら無用心だろ。それで俺が鍵を預かってちよくちよく様子を見に来ることにしたんだ。でも、人がたくさん尋ねてくるし、不審がつてるから、俺がいたほうが安心かなって思ったんだ。

と、今にも泣き出しそうな顔で呟くように弁解している。実際に、もういつ狼が扉を破って入ってくるか分からない。僕も泣きたい。とにかく隠れる場所を探して、僕たちは二人してクム爺のタンスから洋服を全て取り出して、中に隠れた。

扉の金具はガチャガチャと大きな音を立て、ほとんど外れかかっているのが分かる。

「俺は魔力がそんなに強くないから、においもすぐには消えないし、獣を追っ払うなんてできない」

めめめと話を続ける。もうちょっとまじめに魔力の勉強に励んでおくんだったと後悔している。

「旅を始めたばかりなんだろう？ごめんね。もう、出来そうにないね。大丈夫。獣が食べたものは大地に帰るから、死んでも精霊エアダイが祝福してくれるよ」

いや、死ぬことを覚悟しないで欲しい。僕はシャの湖を探さなきゃいけないし、そこに住む精霊に会って祖父の話をしなきゃいけないんだ。

「そういえば、名前を聞いていなかったね。最後に聞かせてよ」

彼がそう言ったとき、ドン！と一際大きな音がした。恐らく壊された扉が倒れた音だろう。

ザザザと得体の知れないたくさんの足音が僕らのいるタンス目掛けてやってくる。

このタンスは下二段が引き出し型で、上は扉を開けると手前が鏡、奥が外套などの洋服をつるすようになっていて。鏡をずらすとその洋服がけが現れる仕組みだ。

狼たちが器用に鏡をずらせるとは思わないが、においを追って力任せに破られると終わりだ。

ガチャリ。タンスの扉を開く音がした。

僕はギュッと目をつぶり、息を呑んだ。

どうしてこうなってしまったんだと考える余裕なんてなかったけど、ただ心臓はひどく早く波打っていた。張り詰めた気持ちの中で彼の質問に答えなかったことが心残りになるんじゃないかと思っただ。

僕の名前。

僕の名前は、

「レピ」

ズツと鏡がずらされ、急に視界が明るくなったのが分かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9146m/>

ラヴィ・ツ・レピは旅をする

2010年10月9日22時11分発行